

報告タイトル「新型コロナウイルスとサプライチェーン：アップル社を中心に」

氏名 菊池 航 所属 立教大学

キーワード（3つ程度）：①サプライチェーン ②不確実性 ③市場における調整  
要約（Abstract）

### 1. 新型コロナ問題が想定されている業界・機能等に与えたインパクト

2019年に1兆5400億ドルであった世界の海外直接投資額は、2020年には最大40%減少すると予測されており、1兆ドルを下回るのは2005年以来初めてのことである（UNCTAD [2020] “World Investment Report 2020”）。コロナウイルスは、多国籍企業のサプライチェーンの再構築を促すであろう。

### 2. 想定されている多国籍企業の対応方策・取り組み

世界の製造業に占める中国の製造業の割合は、2004年から2017年にかけて2倍以上になっており、中国は国際的なサプライチェーンの中心的存在である。多国籍企業は、新型コロナ問題を1つのきっかけとして、中国への過度な依存からの脱却を進め、サプライチェーンの多様化を目指すと考えられる（Baldwin, R. [2020] Trade conflict in the age of Covid-19）。例えばアップルのサプライヤーにおいては、インドやベトナムの生産能力を拡充する動きが盛んである。

### 3. 今後の展望

多国籍企業は、不確実性に影響を受けにくいサプライチェーンを構築するため、国内回帰（Reshoring）、地域化（Regionalization）、グローバルな分散の推進などの選択肢を検討している。日本の企業経営者は国内回帰しないと考えているようであるが（『日経ビジネス』2020年8月17日）、ロボット化を支える技術がさらに進展すれば（Baldwin, R. (2019) The Globotics Upheaval, Oxford University Press）、国内回帰はそこまで非現実的な選択肢ではないと思われる。

### 4. これからの研究テーマ

外部の不確実性に影響を受けにくいサプライチェーンをいかに構築するか、というのは1つの研究テーマになると考える。例えば戸堂康之氏は、企業同士が長期にわたって取引を行ない、信頼関係を構築することの重要性を指摘している（『日本経済新聞』2020年4月16日）。歴史的な視点から考えれば、市場から組織へ（Visible Hand）、組織から市場へ（Vanishing Hand）というトレンドを経験してきたが、今後は、市場における調整が重要なテーマであろう。